

2026 年度 大学院入試(秋季募集)日本文学専攻(修士課程)【出題意図】

中世文学

問一 『宇治拾遺物語』の古本系統の一つ、宮内庁書陵部蔵本（いわゆる御所本）の冒頭に載る、一般に「序」と呼ばれているものの翻刻を、段落に分け、適宜漢字を充てたり、送り仮名を送ったり、濁点や句読点を付したりして、本文を校訂する問題。どこに濁点や句読点を打つか、どのように送り仮名を送るか、どこに漢字を充てるか、どこで段落を分けるかは、本文の内容を理解できていなければできない。また、この古本系のいわゆる「序」は、文中に空白（余白）や欠字があるので、『宇治拾遺』のいわゆる「序」がどのようなものなのかという基礎的な知識も必要である。これはこうした古文の読解力や、基本的な知識を問う問題である。

問二 問一に続く問題。『宇治拾遺』のいわゆる「序」の前半に記されているのは、『宇治大納言物語』のことである。そのことが読み取れるかを問う問題であり、古文の読解力が試されるもの。

問三 問一・二に続く問題。『宇治拾遺』のいわゆる「序」の後半は、『宇治拾遺物語』がどのような作品であるかを説明するものである。このことを読み取って、この作品の名称と、これがどのような作品であると称しているか、また、文学史の知識として、『宇治拾遺』について知るところを問う問題。これも古文の読解力を問うとともに、基本的な文学史の知識をも問う。

問四 「説話とはどのようなものか」と考えるかを問う問題。これは研究者の間でも見解が分かれるものであるため、受験者本人が説話についてどこまで理解しているか（あるいは考えているか）を問うものである。中世は説話の時代と呼ばれるほどに、説話集のみならず、歴史物語、軍記物語、その他諸書に素材として用いられているものであって、説話に対する基本的な知識や理解は、中世文学を研究する上で重要なものである。これはそんな説話の性格・性質を、どこまで理解しているか、どこまで考えているかを問う。

【出題意図】

近現代文学

問Ⅰ

以前から、問Ⅰでは文学作品の本文を具体的に引用し、読解を求めている。本問では、横光利一「頭ならびに腹」の冒頭部分を取りあげた。問題の指示として「横光に関する文学潮流にも必ず言及すること」と書いたように、引用部分の語りや表現をそれ自体単独で読み説くというより、横光やこの作品の文学史的な位置づけを踏まえた解答が求められる。

横光は大正末期、川端康成らとともに新感覚派の作家として注目された。新感覚派は海外の前衛芸術運動の影響を受け、既成のリアリズム文学を乗り越えた新しい方法論で文学を追求したが、注目されたきっかけは「頭ならびに腹」である。

設問では、まず「①冒頭部分〔中略〕より前〕における表現上の特徴」を説明することを求めた。冒頭では、「特別急行列車」が「全速力で馳けていた」、「沿線の小駅は石のように黙殺された」という擬人法や比喻により、人間不在のまま特急列車というテクノロジーを表現している。この特徴が当時の文壇に衝撃を与えたことは、文学史の常識的な知識として修得しておくべきことである。

次に「②〔中略〕以降における人間の描き方の特徴」の説明を求めた。〔中略〕以降では、線路支障のために停車した「特別急行列車」の乗客たちが描かれている。ただし、個々の具体的な人物の様子は語られず、「彼等」「数箇の集団」「彼ら集団」のように匿名の「集団」として語られ、その様子も「押し襲せた」「波のように崩れ出した」とあくまで「集団」の動きとしてしか語られない。個としての人間ではなく、あくまでも群衆という単位で人間を描くという特徴が読み取れるはずである。なお、作品内には「集団」と対比される一人の「小僧」も登場するが、本問に引用した部分には登場しない。

問Ⅱ

自然主義の文学について、「成立時期、文学的な特徴、代表的な作家・作品、その後の文学への影響」を説明することを求めた。

自然主義文学の成立時期は明治30年代である。フランスの作家エミール・ゾラの自然主義文学が科学的な実証精神に基づいた社会や人間の客観的な把握を目指したものであったのに対し、日本の自然主義は、作家が正直にあるがままを描くという方向性で展開されていった。代表的な作家・作品としては、その後の文学への影響についての説明とも重なることになるが、島崎藤村『破戒』と田山花袋『蒲団』を挙げることが必須である。中村光夫は、『破戒』は西欧の自然主義に連なる社会性を持った小説であったが、日本の自然主義文学は、作家の自己告白を描いた『蒲団』の方向に進み、近代文学の歪みとなったと整理した。近年では批判も多い見解であるが、文学史的記述として覚えておくのが当然である。

2026年度 大学院入試(秋季募集) 日本文学専攻(修士課程)

【出題意図】

「現代文化」

設問1 (解答例)

「文化」という語については、その内容の多様性や、内包する論理の矛盾が、まず著者によって指摘されている。ただし当該抜粋では、それ以前の二つの問題に重点が置かれている。

第1に、文化という日本語の使用範囲がきわめて広大になった半面、「文化とは何か」をあらためて問題にする態度がとられなくなったことがある。第2に、「文化とは何か」という問いへの答えが、否定形でしか語りようのないものであることも挙げられる。これはすなわち、自然科学・社会科学が対象としない領域に「文化」の問題を位置づける傾向のことである。そうした態度はカルチュラル・スタディーズによって問題化されるに至ったものの、依然として、理解できないことを「文化」として学問のなかで周縁化する慣習は維持されている。

設問2 (出題意図)

現代文化の研究は、日本文学専攻であっても国際的な視野に立つことが重要である。とくに日本で創作された様々な現代的表現が、グローバル文化(産業)状況の中でどのような状況に置かれているかを知っていることは、大学院進学後の研究活動をスムーズにスタートさせるうえで必要である。そのため、設問2を出題した。